

主体的に活動する意欲を育てる ボランティア教育の進め方に関する研究

—身近な場面での児童一人一人の思いを大切にしたい課題追究の取り組みをとおして—

花泉町立金沢小学校 教諭 阿部 和実

I 研究目的

学校教育指導指針によると、ボランティア教育においては、「豊かな体験活動をとおして、社会的な有用感や感動体験を味わわせ、児童生徒の人間性をはぐくみ、自らの生き方を主体的に考える態度を育成する」ことが求められている。特に、この主体的に考える態度を育成するための土台として、活動する意欲を育てることは、小学校段階でのボランティア教育において価値あることと考える。そして、これは「生きる力」の育成にもつながる大切な要素ととらえることができる。

しかし、本校児童の実態をみると、体験的な活動には進んで取り組んではいるものの、活動意欲が持続せず、次への主体的な活動につながらない現状がみられる。これは、児童の意識のなかに、ボランティア活動というと施設を訪問するなど特別なことと考える傾向があることや、活動自体が、教師により設定された取り組みであるために、自分の課題としてとらえる意識が弱いためと考える。

このような状況を改善するためには、学校や家庭、地域など身近な場面での児童一人一人の思いを大切にしたい一連の課題追究の取り組みを設定することが必要である。これを実践することで、児童の考えは深まり、新たな気づき生まれ、児童の主体的に活動する意欲を育てることになると考える。

そこで、この研究は、身近な場面での児童一人一人の思いを大切にしたい課題追究の取り組みをとおして、主体的に活動する意欲を育てるボランティア教育の進め方について明らかにし、小学校ボランティア教育の充実に役立てようとするものである。

II 研究仮説

小学校のボランティア教育において、身近な場面での一人一人の思いを大切にしたい一連の課題追究の取り組みを次のように行えば、児童の主体的に活動する意欲が育つであろう。

- 1 日常的に自分たちにできるボランティア活動を探す。
- 2 友達との学び合いにより自分の課題を設定する。
- 3 振り返りを共有することにより活動の成果を確かめる。

III 研究の内容と方法

1 研究の内容

- (1) 主体的に活動する意欲を育てるボランティア教育の進め方に関する基本構想の立案
- (2) 主体的に活動する意欲を育てるボランティア教育の進め方に関する実態調査及び調査結果の分析と考察
- (3) 身近な場面での児童一人一人の思いを大切にしたい課題追究の取り組みについての指導試案の作成
- (4) 指導実践及び実践結果の分析と考察
- (5) 主体的に活動する意欲を育てるボランティア教育の進め方に関するまとめ

2 研究の方法

- (1) 文献法 (2) 質問紙法 (3) 指導実践

3 指導実践の対象

花泉町立金沢小学校 第6学年(男子10名 女子8名 計18名)

IV 研究結果の分析と考察

1 主体的に活動する意欲を育てるボランティア教育の進め方に関する基本構想

- (1) 主体的に活動する意欲を育てるボランティア教育の進め方に関する基本的な考え方

「主体的に活動する」とは、自分の意志・判断によって働きかけることである。ここでいう自分の意志は自発性に結びつくものであり、判断は相手意識をもち自分で決めることである。また、相手意識とは、自分の意志によるボランティア活動が相手にとって本当に必要なのかを考えることであり、ボランティア活動を進めるうえで大切なことである。次に「意欲」とは、積極的に遂行しようとする意志のことである。そこで、本研究では、「主体的に活動する意欲」を「自分なりのめあてを設定し、相手意識をもって、進んで活動しようとする意志」ととらえた。

主体的に活動する意欲の構成要素とその意味内容を【表-1】のように考え、研究を進めるものとする。児童は、身近な場面でのボランティア活動を探すことで、自分たちにできるボランティア活動に興味・関心をもち、「自分には何ができるか」「こんなこともできるかな」とボランティアへの思いを広げていくと考える。そのなかから、友達との学び合いをとおして、相手の気持ちも考えながら自分の課題を決定し、追究に向けて見通しをもつ。そして、課題を追究し続けるなかで「やり遂げた」という達成感を味わい、活動後に自分の活動を振り返ることや学級全体で振り返りを共有することで「自分も役に立った」という有用感をもつ。この自己有用感から生まれる自分のよさの気付きと、ボランティア活動自体に内在する価値である思いやりや感謝の気持ちから次への活動意欲が生まれると考える。

そこで、本研究は、小学校ボランティア教育における主体的に活動する意欲が育った児童の姿を「自分の思いを大切にし、相手意識をもって積極的にボランティア活動をしようとする児童」ととらえることとする。

- (2) 身近な場面での児童一人一人の思いを大切にしたい課題追究の取り組みの意義

ボランティア教育においては、「豊かな体験活動をとおして、社会的な有用感や感動体験を味わわせ、児童生徒の人間性をはぐくみ、自らの生き方を主体的に考える態度を育成する」ことが求められている。

特に、小学校段階におけるボランティア教育は、主体的に考える態度を育成するための土台として、活動する意欲を育てることが、今後のボランティア活動の動機付けやきっかけづくりとして大きな意味をもつ。

生活経験が一人一人様々な児童に対して、自分の思いを大切にしたい身近な場面でのボランティア活動に取り組ませることは、明確な課題意識をもたせることになり、主体的に活動する意欲を育てることにつながると思う。

「身近な場面」とは、学校、家庭、地域のことであり、児童の意識のなかには、ボランティア活動

【表-1】主体的に活動する意欲の構成要素

構成要素	構成要素の意味
興味・関心	ボランティア活動への興味・関心
自己決定	相手意識をもって自分の課題を決定
見通し	追究に向けての見通し
達成感	やり遂げたという達成感
有用感	自分も役に立ったという有用感

という施設訪問など、特別なことをするものととらえる傾向がある。ここに、児童の活動意欲を持続させる点で、大きな課題がある。そこで、児童に対して、ボランティア活動とは、いつでも、どこでも、誰でも日常的にできるものであるということを認識させ、身近な場面でのボランティアを考えさせていくことが、活動意欲の持続につながり、主体的な活動へと結び付いていくものとする。

「一人一人の思い」とは、「こんなことができそう」「こんなことをしてみたい」というボランティア活動に惹きつけられる心の働きのことである。

したがって、「一人一人の思いを大切に」するためには、それを教師が共感的に受け止め、実現に向けて支援していくことが大切であり、それによって、児童のボランティア活動に対する思いをより高めていくことができるものとする。

こうした身近な場面での児童一人一人の思いを大切に了一連の課題追究の取り組みをしていくことは、児童に、達成感や有用感を味わわせ、ボランティア活動は楽しいこと、日常的にできること、人の役に立つだけでなく自分のことも成長させてくれるものであることに気付かせ、主体的に活動する意欲を育てるという点で意義のあることである。

(3) 身近な場面での児童一人一人の思いを大切に了一連の課題追究の取り組みの進め方

本研究では、主体的に活動する意欲を育てるための段階を「ひろげる」「かかわる」「たかめる」の3段階に設定する。「ひろげる」段階は課題設定場面であり、「かかわる」段階は課題追究場面、「たかめる」段階は振り返り場面である。「ひろげる」段階で、身近な場面にも自分たちのできるボランティア活動があることに気付かせ、一人一人の思いを広げる必要がある。また「かかわる」段階では、一人一人の思いを大切に了一連の課題を設定することが重要であり、これが活動意欲を持続させる原動力となる。活動後の「たかめる」段階では、個人の振り返りはもちろんのこと、学級全体で振り返りを共有することで、ボランティアに関する考えをより深めていく。この段階を意図的に繰り返し展開することにより、児童の主体的に活動する意欲が育つものとする。

(各段階においての取り組みについては、本資料においては省略)

(4) 主体的に活動する意欲を育てるボランティア教育の進め方に関する基本構想図

これまで述べてきたことについてまとめたものが【図-1】の基本構想図である。

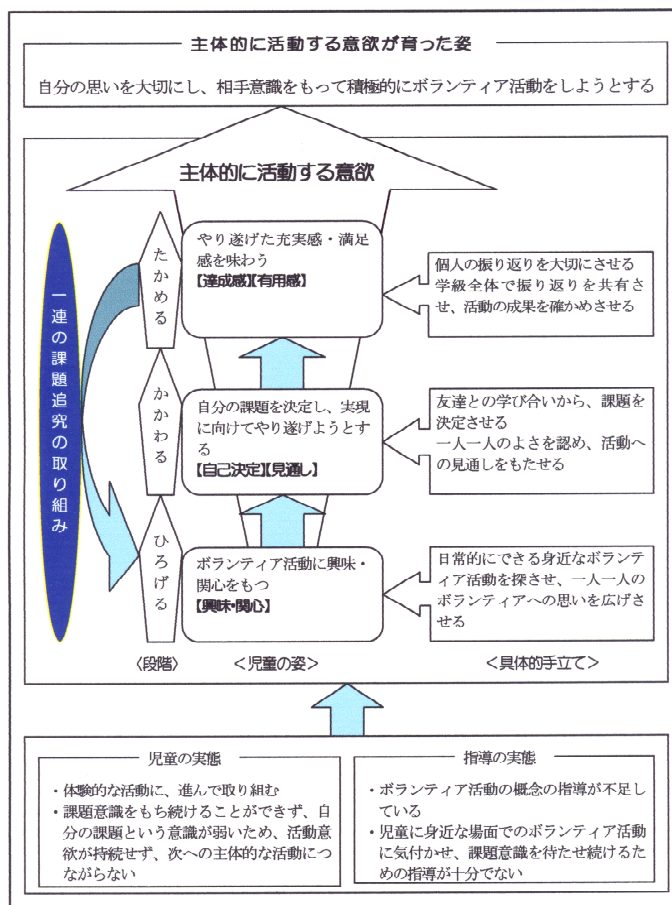
2 主体的に活動する意欲を育てるボランティア教育の進め方についての実態調査及び調査結果の分析と考察

(本資料においては省略)

3 身近な場面での児童一人一人の思いを大切に了一連の課題追究の取り組みについての指導試案

(1) 指導試案作成の観点

実態調査の結果から明らかになったことにより指導試案の観点を次のようにまとめた。



【図-1】 主体的に活動する意欲を育てるボランティア教育の進め方に関する基本構想図

ア 「ひろげる」段階において、児童が日常的にできる身近な場面でのボランティア活動に気が付き、一人一人がボランティア活動に対する思いを広げることができるための工夫をすること。

イ 「かかわる」段階において、自分の考えを公表できるように、学び合いの人数を考慮したり、対人関係の不安を取り除くような手だての工夫をしたりすること。また、自分の課題を決定する際の考える視点を明確にすること。

ウ 「たかめる」段階において、振り返りの共有が効果的に行うことができるように振り返りカードを活用すること。

(2) 身近な場面での児童一人一人の思いを大切にした課題追究の取り組みについての指導試案

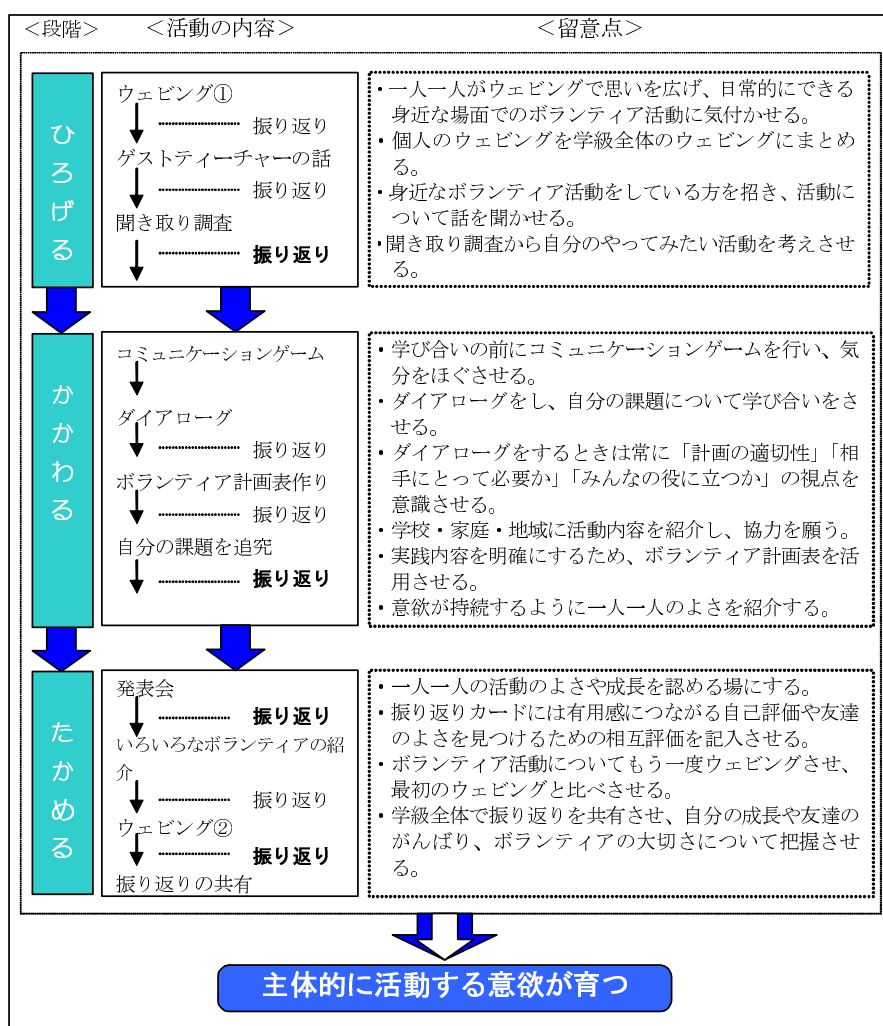
指導試案作成の観点に基づき、指導試案を【図-2】のように作成した。

(3) 検証計画及び調査計画

ア 構成要素の検証計画

身近な場面での児童一人一人の思いを大切にした課題追究の取り組みについての指導試案の妥当性をみるために検証計画を作成した。それをまとめたものが【表-2】である。

意欲の変容については、 χ^2 検定（変化の検定）により分析し、考察する。また、カードへの記述内容や感想は判断基準をもとに分析するとともに、学習活動の様子を参考にして考察する。なお、各段階における主体的に活動する意欲の状況を検証するための判断基準をまとめたものが次頁【表-3】である。



【図-2】身近な場面での児童一人一人の思いを大切にした課題追究の取り組みについての指導試案

【表-2】検証計画

検証項目	検証内容	検証方法	処理の方法
各段階における主体的に活動する意欲の状況	<ul style="list-style-type: none"> 興味・関心 自己決定 見通し 達成感 有用感 	<ul style="list-style-type: none"> 一人一人の活動の様子をカードへの記述内容や感想及び授業記録からとらえる 	<ul style="list-style-type: none"> 評定尺度及び自由記述の質問紙法により分析する 自由記述は【表-3】により分類し記述の内容を分析するとともに、授業の様子を参考にして考察する
主体的に活動する意欲の変容の状況	<ul style="list-style-type: none"> 興味・関心 自己決定 見通し 達成感 有用感 	<ul style="list-style-type: none"> 質問紙法 	<ul style="list-style-type: none"> 主体的に活動する意欲の変容については、評定尺度の質問紙法により、指導実践の事前と事後に実施し、χ^2検定（変化の検定）により分析し、考察する 興味・関心にかかわる自由記述については、本資料においては省略する

【表-3】主体的に活動する意欲の判断基準

検証内容	判 断 基 準			
	A	B	C	D
興味関心	ボランティア活動について進んで調べ、ボランティア活動への思いを大きく広げようとする 「自分も何かやってみたいな」	ボランティア活動を調べ、ボランティア活動への思いを広げようとする 「ボランティア活動は大事だな」	ボランティア活動を調べるが、やらされている活動になる 「ボランティア活動をしなければいけないな」	興味・関心がない 無答
	相手意識をもって自分の課題を決定することができる 「〇〇さんの役に立ちたい」	友達の意見を参考にして、相手意識をもって自分の課題を決定することができる 「この活動をしてみたい」	自分の課題を決定しようとするが十分とはいえない 「何をしたらいいのかな」	課題を決めることができない 無答
見通し	追究に向けて計画を立てたり改善したりと見通しをもつことができる ボランティア計画表に具体的に記述できる 「こうした方がいいな」	追究に向けて計画を立てたり修正したりと見通しをもつことができる ボランティア計画表の記述が抽象的である 「このように進めよう」	追究に向けて見通しをもとうとするが十分とはいえない ボランティア計画表の記述が十分とはいえない 「どうしようかなあ」	見通しをもつことができない 無答
	自分の課題を最後までやり遂げたという達成感と、次への意欲や願いをもつことができる 「やり遂げることができた、次は〇〇をしたいな」	自分の課題を最後までやり遂げたという達成感をもつことができる 「できた」「やったあ」	自分の課題を最後までやり遂げたという達成感を十分にもつことができない 「ようやく終わった」	達成感をもつことができない 無答
有用感	活動を振り返り、自分も役に立ったという有用感をもつことができる。 自分のよさや成長に気が付く 「こんなよさがあった」	活動を振り返り、自分も役に立ったという有用感をもつことができる 「役に立ててうれしい」	活動を振り返り、自分も役に立ったという有用感を十分にもつことができない 「役に立てたのかなあ」	有用感をもつことができない 無答

イ 指導実践にかかわる調査計画（本資料においては省略）

4 指導実践の概要及び実践結果の分析と考察

- (1) 指導試案に基づく指導計画（本資料においては省略）
- (2) 指導実践の概要

指導実践は、総合的な学習の時間を中心に行うことにした。指導試案に基づく指導計画に従って行った指導実践の概要を5、6頁に示した。

段階	学習内容（手だてにかかわる部分はゴシック体で表す）	児童の様子
ひろげる (四時間) *注 は児童の発言	<p>ボランティア活動のイメージを広げる。 (1・2/4時間目)</p> <p>1 「ボランティア」について一人一人ウェビングをする。</p> <p>2 学級全体でウェビングをまとめ、ボランティアについて気が付いたことを発表する。</p> <p>3 どうしてボランティアをするのか調べ活動をする。 〈調べ方〉 ・インターネット (14人) ・図書室の本 (3人) ・施設へ電話 (1人)</p> <p>4 活動のまとめをする。</p> <p>T : 調べてわかったことを発表してください。 C : 仲間を増やす。安心する。平和になる。 C : 自分の生きがい。 C : 人のため。自分のため。 C : した人もされた人も幸せになる。</p> <p>5 振り返りをする。</p> <p>ふりかえりカードから C ウェビングをがいて、こんなにボランティアがあるんだなあと思った。 C ボランティアをしている人の話で「自分のためになる」というのが不思議だった。 C ボランティアをすると自分にとってもやってもらった人にとっても幸せになれることがわかった。</p>	<p style="text-align: center;">〔K児のウェビング図〕</p> <p style="text-align: center;">人の役に立つ活動。 みんなの役に立つ活動。</p>

かかわる

(五時間)

*注

は児童の発言

ダイアログをとおして自分の課題を決定し、ボランティア活動の計画を立てる。(1/5時間目)

- 1 本時の活動内容を確認する。
- 2 コミュニケーションゲームをする。
「困った輪ゲーム」
- 3 ダイアログの説明をする。
(ダイアログの視点)
・相手にとって必要な活動か
・実践可能な活動か
・みんなのためになる活動か
- 4 **ダイアログをする。**

T: それではダイアログを始めましょう。
C1: 低学年が使っている公民館の片づけをしたいと思っている。
C2: 公民館の片づけって何をやるの?
C1: 本の整理。
C2: それだけ? お茶つぎとかしないの?
C1: まだ考えてない。
C3: どぶ掃除とか考えているけどどうかな。
C4: 役に立つことでいいね。すぐにできそうだし地域の役に立ちそうだし。私は金田さんのように読み聞かせをしたいなあとと思っている。
C3: みんな喜んでくれると思う。どこでやるの?
C4: 保育園を考えている。
C5: 動物が好きなので、動物を保護するボランティアをしたい。
C6: いいんだけど、そのボランティアはできそうですか、できなそうに思えるけど。保護って動物学校みたいなものを作るの?
C5: うーん
T: それでは友達の見解を参考に、自分のやってみたいボランティアを決定しましょう。

- 5 自分の課題を決定し、ボランティア計画表に記入する。
- 6 振り返りをする。

[ダイアログの様子]

片づけなくて帰る子がいるって公民館の人も言ってたし、いいねえ、公民館の人も喜ぶと思うよ。

低学年が遊んでいる公民館の片づけに行こうと思う。

相手にとって必要なダイアログしている例

計画のたりないところに気が付いた例

どぶ掃除をしようと思ってるんだ。

みんなの役に立つ活動だけど、どのようにやるの?

泥をとるとか...

もう少しくわしい方がいいんじゃない。

ボランティア計画表
LET'S TRY
カード
6年

- 1 選んだ理由
- 2 ボランティア活動計画

1	いつ
2	どこで
3	だれと
4	どのように
- 3 活動を始めての感想

たかめる

(六時間)

*注

は児童の発言

ボランティア活動についてまとめをし、振り返りの共有をする。(6/6時間目)

- 1 本時の活動内容を確認する。
- 2 ボランティア活動をして新しく気が付いたことやわかったことなどを1時間目にかいたウェビング図につないでいく。
- 3 最初にかいたウェビング図と比べて、気が付いたことを発表する。

ウェビング図に「自分も楽しい」など活動内容以外が増えました。

ボランティアは人のためだけでなく、自分のための活動でもあると思います。

- 4 ボランティア活動についてまとめをする。
ボランティア活動をとおして一人一人が成長したことを確認する。
- 5 振り返りをする。



[K児のまとめのウェビング図]



[授業中の様子]

ウェビング図でずいぶん広がったなあ。

ふりかえりカードより

- C 今日勉強(ウェビング)でボランティアのことが最初よりすごくわかった気がした。ボランティアのことを勉強してよかった。
- C 放課後掃除を休まずしつかりやりたいと思いました。
- C 自分は、ごみ拾いをして人のためになつたと思つた。だから少し成長した。

(3) 実践結果の分析と考察

ア 各段階における主体的に活動する意欲の状況

(ア) 興味・関心の状況

【表-4】から、興味・関心の状況について、どの段階でもおおむね肯定的な反応が多かったことがわかる。

これは、ボランティア活動自体に児童を惹きつける魅力があったことと、活動を自分の意志で決定したことが活動意欲につながったためと思われる。教師は常に児童の活動を観察し、声かけをするなどの支援をしていくことが大切と思われる。

(イ) 自己決定の状況

【表-4】から、自己決定の状況について、おおむね肯定的な反応が多かったことがわかる。

これは自分の課題を決定する前の体験活動や手だてが有効に働いたためと思われる。

否定的な反応を示した児童はひろげる段階で3人であったが、かかわる段階で1人と減っている。かかわる段階でのダイアログをとおして、友達と学び合うことにより自信や意欲につながったためと思われる。一方、かかわる段階で否定的な反応を示した1人の児童は、ダイアログをとおし学び合いをしているうちに、自分の活動が実践できないのではないかと不安になり、課題に迷いがみられたためと思われる。

(ウ) 見通しの状況 (本資料においては省略)

(エ) 達成感の状況

【表-5】は、活動後に書いた感想を、5頁【表-3】の判断基準により分類し分析したものである。(本資料においては児童の感想を省略)

【表-5】から達成感の状況について、すべての児童が肯定的な反応であったことがわかる。

これは、最初は大変と思っていた活動を、最後までやり遂げることで、楽しさや満足感を味わい、達成感に結び付いたためと考えられる。

これらのことから、児童にとって、実際にボランティア活動を実践し、様々な方とのかかわりをもつことは、価値あることだったと思われる。

(オ) 有用感の状況 (本資料においては省略)

イ 主体的に活動する意欲の変容状況

次頁【表-6の①】は、主体的に活動する意欲の事前と事後における変容状況をまとめたものである。児童の主体的に活動する意欲の変容状況を χ^2 検定で表した。その結果、設問2、6については有意差が認められ、設問1、4、8については、有意差が認められなかった。

【表-4】 興味・関心、自己決定の状況

構成要素 段階	興味・関心			自己決定	
	ひろげる	かかわる	たかめる	ひろげる	かかわる
設問 児童	自分もボランティア活動をやってみたくて思いましたか	ボランティア活動に進んで参加することができましたか	これからもボランティア活動をしてみたいと思いますか	やってみたくてボランティア活動を考えてみたいことができましたか	ダイアログをして課題を決定することができましたか
1	B	A	A	A	A
2	A	A	A	A	B
3	A	A	B	B	B
4	B	A	B	B	B
5	A	A	A	C	A
6	A	A	A	C	A
7	B	A	B	B	欠
8	A	A	B	A	A
9	B	A	A	A	A
10	A	A	B	B	A
11	B	A	A	A	A
12	A	A	A	A	B
13	B	A	B	A	A
14	B	A	A	A	A
15	A	A	A	A	B
16	B	A	A	B	A
17	C	B	D	C	B
18	B	B	B	B	C
計	+ A8 B9	A16 B2	A10 B7	A9 B6	A10 B6
	- C1 D0	C0 D0	C0 D1	C3 D0	C1 D0

「注」1 AとBは肯定的な反応、CとDは否定的な反応としA、Dを各々の強い反応とした

【表-5】 達成感の状況

児童	達	意	状況
1	○	○	A
2	○	/	B
3	○	○	A
4	○	/	B
5	○	/	B
6	○	○	A
7	○	○	A
8	○	○	A
9	○	○	A
10	○	/	B
11	○	○	A
12	○	○	A
13	○	/	B
14	○	/	B
15	○	○	A
16	○	/	B
17	○	/	B
18	○	○	A

「注」○はやり遂げた達成感について記述
 /は次への意欲や願いを記述

設問2「自己決定」の高まりは、ひろげる段階でのウェビングやゲストティーチャーの話などの体験から、身近な場面でのボランティア活動を見つけたことができたこと、そして、そのなかから自分のやってみたいボランティア活動を自分で決めることができると思ったことによると考えられる。また、ダイアログにより、友達と学び合うことで、よりよいものにすることができ自信を深めることができたためと考えられる。

設問6「達成感」の高まりは、自分で決めたボランティア活動に積極的に取り組み、大変なことでもやり通すことができ満足感を得たためと考えられる。また、振り返りの時に友達のがんばりについて紹介し合うことで、自分のがんばりを確認したり、ボランティア活動をすることで、たくさんの方に感謝されることに気付いたりしたことも、達成感に結び付く要因となっている。

有意差の見られない設問1は「興味・関心」にかかわる部分で、事前の調査の段階で、すでにプラス反応が多く見られたことが理由であると考えられる。設問4の「見通し」と設問8の「有用感」にかかわる部分は、有意差は見られないものの、全体的にプラス傾向に変容しており、マイナス傾向に変容した児童はいなかった。ただし、設問8では、マイナス反応を示した児童が7人と多い。これは、自分を肯定的に見取るための手だてや振り返りの共有の仕方が不十分だったこと、活動をすることで逆に自分のことを厳しくみる児童もいたことが理由であると考えられる。

【表-6の②】は、自己決定の際の相手意識についての設問3と見通す際の計画修正についての設問5の事前・事後調査結果をまとめたものである。

設問3の結果から、プラス傾向へ変容した児童は6人で、マイナス傾向へ変容した児童は4人だった。全体としてもプラス傾向に変容しており、このことから児童は自分で何をするか決めるとき、その活動が、相手にとって必要か考えるようになっているととらえることができる。

設問5の結果から、プラス傾向へ変容した児童は4人で、マイナス傾向へ変容した児童は2人だった。全体としてもプラス傾向へ変容しており、このことから児童は、活動が計画通りに進まなかったときは、途中で修正をするようになっているととらえることができる。

以上のことから、本研究の指導実践は、一部の意欲の変容には十分ではなかったという反省は残る

【表-6の①】主体的に活動する意欲の事前・事後の変容状況

N=18 (単位:人)

番号	構成要素	設問内容 質問文	事後			χ ² の値	有意差	
			事前	+	-			合計
1	興味・関心	あなたは、ボランティア活動してみようと思えますか	+	13	1	14	0.25	-
			-	3	1	4		
			合計	16	2	18		
2	自己決定	あなたは、ボランティア活動しようとするとき、自分で何をするか決めることができますか	+	7	0	7	11.00	*
			-	11	0	11		
			合計	18	0	18		
4	見通し	あなたはボランティア活動などをすると、計画を立てますか	+	8	0	8	4.17	-
			-	6	4	10		
			合計	14	4	18		
6	達成感	あなたは、何かの活動をした後に「自分はよくがんばったなあ」と思いますか	+	4	0	4	6.13	*
			-	8	6	14		
			合計	12	6	18		
8	有用感	あなたは、何かの活動をした後に「みんなのためになったなあ」と思いますか	+	6	0	6	3.20	-
			-	5	7	12		
			合計	11	7	18		

- 【注】 1 事前調査は、8月30日に、事後調査は9月26日に実施した
 2 調査は、ア・イ・ウ・エの四肢選択で行い、アとイをプラス反応、ウとエをマイナス反応とし、アとエを各々の強い反応とした
 3 χ²検定に用いた公式は下記に示すとおりである。なお、bはマイナス反応からプラス反応へ、cはプラス反応からマイナス反応に変わった数を示す

$$\chi^2 = \frac{(b-c)^2}{b+c}$$
 ただしb+c ≤ 10のとき
$$\chi^2 = \frac{(|b-c|-1)^2}{b+c}$$

 4 有意差の欄の*は、χ²検定において有意水準5%で有意差があることを示す
 5 Nは児童数を表す

【表-6の②】意欲の変容状況 (自己決定) (見通し)

設問 児童	設問3 設問2でアイウを選んだ人は、ボランティア活動を決めるとき、その活動が相手にとって必要か考えますか			設問5 設問4でアイウを選んだ人は、活動が計画通りに進まなかったときに、途中で計画を修正しますか		
	事前	事後	変容	事前	事後	変容
1	B	B	±0	A	A	±0
2	B	B	±0	B	B	±0
3	B	A	+1	C	B	+1
4	C	A	+2	なし	A	
5	なし	A		なし	A	
6	C	B	+1	D	B	+2
7	C	B	+1	C	C	±0
8	B	B	±0	D	C	+1
9	B	B	±0	B	C	-1
10	C	C	±0	D	D	±0
11	B	B	±0	B	A	+1
12	B	A	+1	C	C	±0
13	B	C	-1	なし	A	
14	D	B	+2	なし	なし	
15	A	A	±0	D	D	±0
16	B	C	-1	A	B	-1
17	B	C	-1	なし	C	
18	B	C	-1	C	C	±0
計	17人	18人	+4	13人	17人	+3
	A1	A5	+変容	A2	A5	+変容
	B11	B8	6人	B3	B4	4人
	C4	C5	-変容	C4	C6	4人
	D1	D0	4人	D4	D2	2人

- 【注】 1 A:考える・修正する B:どちらかという考える・修正する
 C:どちらかという考えない・修正しない D:考えない・修正しない

ものの、全体をとおして、主体的に活動する意欲を育てるうえで効果があると考えられる。

ウ 事前・事後調査の記述内容から構成要素の変容状況

【表-7】は、達成感の変容を見る設問6と有用感の変容を見る設問8を受けて、どんなときに達成感と有用感をもつか記述した結果をまとめたものである。

【表-7】意欲の変容状況（達成感に関する記述）（有用感に関する記述）

設問 児童 の活動	設問7 設問6でアイウを選んだ人は、どんな活動をしたときに「自分はよくがんばったなあ」と思いますか							設問9 設問8でアイウを選んだ人は、どんな活動をしたときに「みんなのためになったなあ」と思いますか								
	ボランティアにかかわる記述					その他	記述なし	ボランティアにかかわる記述					その他	記述なし		
	喜	役	困	興	活			喜	役	困	興	活				
1 公民館			② ←			①										①
2 どぶ	② ←	①													◇	
3 どぶ	② ←															①
4 体育館			② ←													①
5 公民館															◇	
6 交流																② ← ①
7 ゴミ						◇									◇	
8 ゴミ						② ←										①
9 ゴミ		② ←														② ← ①
10 保育園				① →	②										① →	②
11 ゴミ			◇												② ← ①	
12 ゴミ															② ←	①
13 体育館						② ←										①
14 公民館		② ←														①
15 交流	② ←															①
16 ゴミ						② ←										①
17 ゴミ			② ←													①
18 ゴミ																① → ②

【注】 1 ①は事前調査、②事後調査、◇は事前調査と事後調査が同じ場合を表す

2 喜は喜ばれる活動、役は役立つ活動、困は困難な活動、興は興味のある活動、活はボランティア活動を表す

3 記述なしは、設問6・設問8でエ（思わない）を選択

設問7の結果から、ボランティア活動以外で達成感を味わっていた児童や、自分はよくがんばったとは「思わない」と答えていた児童が多かったが、ボランティアにかかわる記述をしている児童が増えていることがわかる。このことから、ボランティア活動をとおして達成感を味わった児童が多かったととらえられる。

設問9の結果から、事前調査では、自分はみんなのためになったとは「思わない」と答えている児童が10人と多かったが、事後調査では、ボランティア活動にかかわる記述をしている児童が、12人に増えたことがわかる。また、有用感を味わっていないと感じている5人中4人が、ゴミ拾い活動を実践した児童である。これは、人とのかかわりが少ない活動であるということや体験したことを見つめ直し、自分を振り返るための手だてが十分でなかったことによると思われる。ボランティア活動は、本来、ほめられたり代償を求めたりするものではない。したがって、人とのかかわりをもたずに認められないために有用感をもてなかったというのは、本来の筋ではないと思われる。しかし、小学生の発達段階において、人とのかかわりのなかで認められ、有用感を味わうこともあることから、このことについては、さらに研究を深めていく必要がある。

以上のことから、有用感を味わわせる手だてについて、検討を要する部分があるものの、児童は、ボランティア活動をとおして、達成感や有用感を味わうことができたと思われる。（記述内容からの「興味・関心」に関する意欲の変容状況について、本資料においては省略）

5 主体的に活動する意欲を育てるボランティア教育の進め方に関する研究のまとめ

主体的に活動する意欲を育てるボランティア教育の進め方について、「成果」「課題」の2点についてまとめることとする。

(1) 成果

ア 「身近な場面でのボランティア活動を探す」手だてにかかわっては、ウェビングや聞き取り

調査などを行うことで、児童に自分たちの身近な場面に日常的にできるボランティア活動があることに気付かせ、ボランティアのイメージを広げることにつながったこと。

イ 「友達との学び合いをする」手だてにかかわっては、ダイアログをすることで、自分の課題を、よりよい課題にすることができ、自信をもって課題を設定することにつながったこと。

ウ 「振り返りを共有する」手だてにかかわっては、ふりかえりカードを活用し、活動中の様子や気が付いたことについて、視点を与えて記録し発表したり、振り返りを共有する場を設けたりしたことで、自分や友達のがんばりを確認し、ボランティア活動の特性について考えることにつながったこと。

エ どの児童もボランティア活動の楽しさを味わい、ボランティア活動は特別なこと、大変なことというイメージから、大変だけどやり遂げると楽しい、人のためだけでなく自分のためになる活動であると考えられることにつながったこと。

オ 身近な場面でのボランティア活動をさせることにより、ボランティア活動を児童が好意的に受け入れることができたこと。

(2) 課題

ア どの児童も満足感を得ることができるよう支援の仕方を考えていくこと。

イ 有用感から自分のよさや成長の気付きへとつなげる手だてを工夫していくこと。

ウ 振り返りの共有が児童一人一人の学びの深まりになるような共有の仕方を考えていくこと。

以上のことから、課題はあるものの、小学校ボランティア教育において、身近な場面での児童一人一人の思いを大切にしたい課題追究の取り組みを進めることは、主体的に活動する意欲を育てることに有効であると考えられる。

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

本研究は、身近な場面での児童一人一人の思いを大切にしたい課題追究の取り組みをとおして、主体的に活動する意欲を育てるボランティア教育の進め方について明らかにし、小学校ボランティア教育の充実に役立てようとするものである。そのために、主体的に活動する意欲を育てるボランティア教育の進め方に関する基本構想を立案し、指導試案に基づいた指導実践をとおして、指導試案の妥当性を検討してきた。その結果、研究仮説の有効性を確かめることができた。

2 今後の課題

本研究で実践してきたこのボランティア活動を一つのきっかけとして、その後どのような取り組みをしていけば、児童の主体的に活動する意欲がさらに高まり、内容的にも深まっていくのか、学校教育全体を見通しての、学年の系統性を考えた活動を立案していく必要がある。

また、児童にボランティア活動の楽しさや有用感を味わわせるためには、ただ、ボランティア活動を体験させるだけでなく、ねらいをもって、人とのかかわりや交流のある体験を取り入れていく必要がある。

【主な参考文献】

- | | | |
|------------|------------------------------|-------|
| 仙台市教育センター | 「わたしたちの研究」長期研修員研究報告書第8号 | 2001年 |
| 池田幸也・長沼豊編著 | 「総合的な学習 こう展開する ボランティア学習」清水書院 | 2002年 |